感動を糧（かて）にして勉強しました

先週の英語に引き続き、今日は国語について書きます。中一の担任H先生が国語の担当でした。しかし、専門は国語ではありません。家庭科を専門とする女性の先生でした。

H先生は、実に美しい文字を書く方でした。国語は特別好きなわけではありませんでしたが、H先生と、先生の筆跡は大好きでした。先生が書く文字はただ単に形が整っているだけではなく、流れるように縦に綴（つづ）られていました。私はそれを見るだけで「日本語の文字ってきれいだなあ」といつも感動していました。。

その感動がきっかけになったのでしょうか。国語を面白くないと思ったことは一度もありません。生徒が発言すれば、H先生が黒板に書いてくれる……それを目指して手を挙げていました。

必死だったことが一つありました。それは漢字テストです。H先生の漢字テストは教科書数十ページにわたる範囲から、百問を出題するというものでした。八十点以下は、合格するまで追試が続きました。出題される漢字は、教科書の出題範囲に載っているもの全てです。私は追試を避けるためではなく、先生を喜ばせようと思って漢字の勉強をしていました。

勉強が大変そうに思えますが、私にはH先生の漢字テストが、効率的な学習法を見つけ出すきっかけになりました。

「書ける漢字は練習しない。」当たり前のようですが、何も考えずにやみくもに練習すると、なかなかできないものです。全ての漢字を練習しようとしてしまいます。どれが書ける漢字で、どれが書けない漢字か……それを明確に意識することから、私の漢字練習は始まりました。

「反射的に出てくるまで漢字を練習する。」中学入学と同時に、念願のラジカセを買ってもらいました。それを使って漢字を練習しました。書けない漢字をピックアップした後、ラジカセにその読みを自分の声で録音します。一語一語の間隔は五秒。そして、それを再生し、読みを聞いたら五秒でその漢字を書きます。すぐに浮かんでこない漢字は要注意。全て書ききるまで繰り返し録音を流して練習しました。漢字は後で思い出そうとしても、その時に出てこなかったら、まず書けません。反射的に漢字が頭に出てくることが大切です。

H先生は、家庭科を専門にしながら、日本語の文字の美しさ、漢字に対する自信を私に与えてくださいました。現在、九十歳を少しこえた年齢になられているかと思います。毎年年賀状で毛筆の筆跡を目にするたび、昔の感動が蘇ってきます。私は、感動を糧にして国語を勉強していたと言えるのかもしれません。

（十月十九日　記）